

明治 35 (1902) 年台北刊行の『警察監獄学雑誌』検討一斑 (四訂稿)

—湯目補隆検討補遺—

(令和 4 (2022) 年 7 月 31 日 (日) 現在)

(補正経緯)

HP 初出: 平成 22 (2010) 年 4 月 18 日 (日) 初稿作成  
平成 22 (2010) 年 4 月 22 日 (木) 改訂稿作成  
(全編補正、追加)  
平成 26 (2014) 年 11 月 19 日 (水) 再訂稿作成  
(一部補正、追加)  
平成 27 (2015) 年 1 月 12 日 (月) 三訂稿作成  
(一部補正、追加)  
令和 4 (2022) 年 7 月 31 日 (日) 四訂稿作成  
(レイアウト全面変更、一部補正、追加)

〔目 次〕

1 はじめに .....	1
2 『警察監獄学雑誌』とは何ぞ .....	2
3 『警察監獄学雑誌』と湯目補隆 .....	4
【附録】本 HP 掲載鷺巢敦哉氏関係資料一覧.....	4

1 はじめに

先に台湾総督府警察官及司獄官練習所の初代所長であった湯目補隆 (ゆのめ すけたか、1858～1936) について検討した際<sup>1</sup>、高橋雄豺博士 (1889～1979) が夙に『明治警察史研究』第 1 巻 (令文社、昭和 35 年 3 月 1 日刊) 52 頁 (「明治十八年の警官練習所」) で指摘された湯目補隆「発刊祝辞」『警察監獄学雑誌』第 1 号 (台北、明治 35 年 2 月刊。未見。) に触れた。高橋博士の当該論説の初出は、戦前 (昭和十年代) の『警察協会雑誌』である<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 本 HP 別稿「湯目補隆氏関係資料一斑—日本統治下台湾警察史・明治警察史の一齣—」 (平成 21 年 10 月 29 日初稿作成) 参照。 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yunome001.pdf>>

(以下平成 26 年 11 月 19 日追加) その後、続稿として本 HP 別稿「佐倉孫三及び湯目補隆両氏の足跡について—領台初期の日本人関係文献—」 (平成 22 年 6 月 15 日初稿作成) を作成した。

<<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakurayunome.pdf>>

<sup>2</sup> 高橋博士が何故に『警察監獄学雑誌』のようないわばマイナーな台湾の警察雑誌に言及されたのか多大の興味を引くが、これは、あるいは、下記のようにも推測できる。高橋博士「明治十八年の警官練習所」の初出は、「明治十八年の警官練習所 (1～13)」『警察研究』第 9 巻第 4 号～第 12 巻第 8 号 (昭和 13

が、寡聞にして、長く、この明治 35（1902）年に台北で創刊された『警察監獄学雑誌』の現物はもとより、これについて言及した他の文献をも知らず、同誌は、日本統治下台湾の「幻の警察雑誌」かと思っていた。

しかるに、先般、偶然一部分ではあるが同誌を見ることができたので、以下、湯目補隆再検討をも兼ねて、同誌の概要及び同誌における湯目の関係記載事項等について、一瞥しておくこととする<sup>3</sup>。

## 2 『警察監獄学雑誌』とは何ぞ

湯目補隆は、明治 30（1897）年 9 月以前に渡台し、まず、台湾総督府民政局事務官兼台湾総督府民政局参事官〈ママ〉に就任している。ちなみに、湯目と関係の深い第 4 代台湾総督児玉源太郎（1852～1906）の在任年月は、明治 31（1898）年 2 月 26 日～同 39（1906）年 4 月 11 日、また、台湾総督府民政局長（後に民政長官）後藤新平（1857～1929）の在任年月は、明治 31（1898）年 3 月 2 日～同 39（1906）年 11 月 13 日（明治 31 年 6 月民政長官に改制）である。

明治 31（1898）年 6 月 18 日勅令第 112 号「台湾総督府警察官及司獄官練習所官制」（以下、同所は「警官練習所」とも略称する。）が發布され、同年 7 月 1 日同所創設とともに、湯目は、所長（総督府参事官兼任）となり、明治 36（1903）年 3 月 21 日の休職まで在任する<sup>4</sup>。この間の湯目の警官練習所運営の功績は大きなものがあるが、周知のように、同氏

---

年 4 月～16 年 8 月刊。この他に、戦後「続明治十八年の警官練習所」『警察研究』第 23 巻第 7 号（昭和 27 年 7 月刊）がある。）であるが、ヘーン大尉（1839～1892）が教えた東京の警官練習所の独語訳官として著名な湯目補隆の台湾における事績について、初出稿執筆当時、人を介して台北の鷺巣敦哉（1896～1942）に種々問い合わせをしている（鷺巣敦哉「道聴塗説」『台湾警察時報』第 290 号（昭和 15 年 1 月刊）、『鷺巣敦哉著作集 V 雑誌所収著作』（緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊）455 頁に再録。）。それによれば、高橋博士が湯目補隆と台北の警官練習所との関係について気付かれたのは、鶴見祐輔（1885～1973）編『後藤新平』（全 4 巻、後藤新平伯伝記編纂会）第 2 巻（昭和 12 年 7 月 20 日刊）152～153 頁（台湾警官練習所制度の創設）を読まれてのことであり、これを受けて、鷺巣敦哉に依頼し、鷺巣は「私共の調べた範囲内の回答は申し上げます。」とのことである。おそらく、鷺巣の回答中に『警察監獄学雑誌』のことが触れられていたものと思われる。（平成 22 年 4 月 22 日追加）

<sup>3</sup> 初稿作成後、知人から指摘されて、HP「日本の古本屋」を検索したところ、平成 22（2010）年 4 月 19 日現在、東京・文生書院に第 1 号～第 12 号の 12 冊でもって第 1 巻とする商品（売価：252,000 円）が存在することが判明した。これからすると、本誌全号が、現に国内にあることがわかる。無知を恥じるものである。（文生書院 HP 〈<http://www.bunsei.co.jp/>〉）  
〈<http://www.kosho.or.jp:80/public/book/detail.do?tourokubi=86D834466F034522E743CEE99488CB B28B32CCC029D8AA7A&seq=1287&sc=4C127111151996524ED18997687098EA>〉（平成 22 年 4 月 22 日追加）

（平成 26 年 11 月 19 日追記：HP「日本の古本屋」〈<http://www.kosho.or.jp/servlet/top>〉によれば、現時点では同じ東京・文生書院より売価 216,000 円で販売されている。令和 4（2022）年 7 月 31 日追記：現時点でも状況は同じである。ただし、売価は 220,000 になっている。）

<sup>4</sup> 警官練習所の創設につき、本 HP 別稿「台湾総督府警察官及司獄官練習所覚書—日本統治下台湾警察史の一齣—」〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatvoshi/renshujo.pdf>〉参照。（平成 26 年 11 月 19 日追加）

の休職退任については、いろいろと問題もあったようである<sup>5</sup>。ここでは、それらはさておき、対象を『警察監獄学雑誌』についてのみ限定する。

本誌については、上記高橋博士論説がいうように、創刊号たる第1号（明治35年2月11日刊）には、湯目の「発刊祝辞」（警官練習所創設の事情に言及されている由）があるとのことであるが、遺憾ながら、現時点では、同号及び第2号は、上記文生書院商品（註3参照。）を除くと、国内、台湾<sup>6</sup>ともに、一般には見ることができない。

国内で普通に実見できる最初のもは、第3号である。同号の表紙に拠ると、「[一行目] 毎月一回（十一日）発行 明治三十五年二月十日第三種郵便物認可

[二行目] 明治三十五年四月十一日発行（禁転載） [三行目] 警察監獄学雑誌 第三号 [四行目] 主幹 木下龍<sup>7</sup> 小南清話会<sup>8</sup> 出版」とある。次いで、「本号目次」があり、「●講義 ●論説 ●雑録」（その後の号では、●翻訳、●会員文壇、●懸賞論文、●小説、●寄書、●会員来信等も存在する。）の順で、掲載物の各表示がなされている。なお、その下に、「前号目次」が出ているため、実見できない第2号（おそらく明治35年3月11日刊）の内容は、一応把握は出来る。

第3号末尾に、赤色の挿入頁があり、表に「概則」があつて、同誌の目的、掲載要領そ

---

<sup>5</sup> 『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』（台湾総督府警察官及司獄官練習所、明治42年3月10日刊）15頁は、明治36（1903）年3月21日の湯目補隆の休職その他につき、「裏面ニ於ケル弊風ヲ一掃スルノ必要ヲ認め ……………」とだけ記している。当時の文献を更に渉猟する必要がある。なお、鷺巣敦哉（1896～1942）『台湾警察四十年史話』（自己出版、昭和13年4月28日刊。復刊：『鷺巣敦哉著作集Ⅱ 台湾警察四十年史話』（緑蔭書房、平成12年12月10日刊）287頁、『鷺巣敦哉著作集Ⅴ 雑誌所収著作』（緑蔭書房、平成12年12月10日刊）303頁には、練習所長関係の具体的なことが少し記載されているが、当該所長はおそらく湯目の後任者（専任所長）のことかと思われる。（平成22年4月22日、令和4年7月31日各一部修正）。

<sup>6</sup> 例えば、台湾のものについては、さる識者の御示教に拠れば、「経上網查看臺灣各大學圖書館暨國家圖書館、國立中央圖書館臺灣分館、國立台中圖書館、國史館臺灣文獻館的 OPAC，結果僅在國史館臺灣文獻館〈<http://ds2.th.gov.tw:80/ds3/>〉的 OPAC 發現」との由である。同氏に厚く御礼申し上げるものである。

<sup>7</sup> 木下龍は、明治33（1900）年2月14日付で（奏任）教官（七等十一級）に任命され、同35（1902）年12月末、同36（1903）年12月末でも同一であり、同37（1904）年3月31日六等十一級に昇等級、同38（1905）年8月3日休職、同40（1907）年8月2日休職満期となっている（前掲『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』15、20、22、25頁）。（平成22年4月22日一部補正）

<sup>8</sup> 「小南清話会」は、同誌刊行等を目的に警官練習所内で組織された団体であろう。おそらくや同誌第1号にその会名の由来が記載されていると思われるが、未見のため、以下に推測しておく。警官練習所は、台北城小南門外の南西方向にあった。同地は、最初の頃は、広い意味では「台北県艋舺」であるが、明治35（1902）年5月1日現在では、「台北庁大加納小南門街」といった（『旧植民地人事総覧 台湾編1』（日本図書センター、平成9年2月25日刊。当該年度の『職員録』（内閣官報局）から抽出したもの。）136、382頁）。よって、「小南」と名づけたものと思われる。なお、警官練習所には、「小南清話会」の他に、「談笑会」なる会も存在していたようである（同誌第3号54頁参照）。（平成22年4月22日一部修正）

の他が記載され、裏には「読者諸君に告ぐ」がある。最後の頁には、上段に「質疑及寄書」の注意書き、下段に「発売規程」及び「奥付」がある。「奥付」によれば、「発行所 台湾総督府警察官及司獄官練習所構内 小南清話会

右代表者 台北市新起街三十番戸二号 林 行蔵<sup>9</sup> 印刷所 台北城内西門街 株式会社台湾日日新報社」とある。

これらよりすると、同誌は、湯目補隆が所長であった警官練習所内で組織された「小南清話会」名義刊行の警察学及び監獄学に関する雑誌とすることができる。

ちなみに、以下、第4号（明治35年5月11日刊）、第5号（明治35年6月11日刊。未見。ただし、第6号裏に「前号目次」あり。）、第6号（明治35年7月11日刊）、第7号（明治35年8月11日刊）、第8号（明治35年9月11日刊）、第9号（明治35年10月11日刊）、第10号（明治35年11月11日刊）、第11号（明治35年12月11日刊。未見。ただし、第12号裏に「前号目次」あり。）及び第12号（明治36年1月11日刊）が刊行されている。同誌第13号以下が刊行されたか否かは不明であるが、湯目補隆は、上述のように、明治36（1903）年3月21日に休職になっており、その前後にいろいろあったようであるので、おそらくや第12号でもって休刊になったのではないかと思われる。

なお、第8号（明治35年9月11日刊）表紙裏の主幹木下龍の記す文章によれば、「本誌号を重ねる僅に八回に過ぎずと雖も、今や本島内のみに於ける読者に対して毎月配布する部数は実に三千の上に達せり。」とのことである。

### 3 『警察監獄学雑誌』と湯目補隆

次に、『警察監獄学雑誌』に見たる湯目補隆関係記載事項であるが、残念ながら、最も重要と思われる創刊第1号が見られないので、詳しいことは判明しない。ここでは、上記各号の記載する同氏関係の記事を、取りあえず抽出するにとどめる。今後更に機会をとらえて検討していきたいと考えている。

\*第1号（明治35年2月11日刊。未見。ただし、高橋雄豺博士『明治警察史研究』第1巻（令文社、昭和35年3月1日刊）52頁に拠る。）

- ・湯目補隆「発刊祝辞」（警官練習所創設の事情に言及されている由）
- ・その他不明

\*第2号（明治35年3月11日刊。未見。ただし、第3号裏に「前号目次」あり。）

- ・不明。

\*第3号（明治35年4月11日刊）

- ・「●雑録」：宮崎直道<sup>10</sup>「警察彰功録 故総督府警部脇山熙氏」（62～67頁）中66頁に「湯目補隆」名の追悼漢詩あり。

<sup>9</sup> 林行蔵については、第2号（おそらく第1号にもありか。）以下に収録の木下龍口述「民法総則編大意（承前）」本文表題横に、「筆記者」として同氏の氏名が記載されているので、おそらく同誌の事務方を務めていた者かとも思われる。（平成22年4月22日一部修正）

<sup>10</sup> 宮崎直道は、警官練習所（判任）教官である。明治34（1901）年1月14日任命、明治36（1903）年4月1日依願免官（諭旨免官）（『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』15、20、22頁）。

\*第4号(明治35年5月11日刊)

・なし。

\*第5号(明治35年6月11日刊。未見。ただし、第6号裏に「前号目次」あり。)

・第6号裏の「前号目次」「●雑録」中に、「児玉総督閣下練習所長に飾銃架を賜ふ」あり<sup>11</sup>。

\*第6号(明治35年7月11日刊)

・「●雑録」中、「第六回甲科練習生修了式」(41~59頁)に湯目所長の言動、行動の記載あり。

\*第7号(明治35年8月11日刊)

・「●雑録」中、「湯目所長の訓示」(43~52頁)に、当時蔓延したコレラ対策に関する警官練習所内の訓示の要領あり。

・「●雑録」中、によすい(おそらく宮崎如水<sup>12</sup>か。ただし、最初の頃は林久三<sup>13</sup>の日記に拠る。)[「日記の一片[未完]」(69~79頁)に、湯目所長全島巡視の際の言動、行動の記載あり。

\*第8号(明治35年9月11日刊)

・「●雑録」中、「第三回警察官部乙科練習生修了証書授与式」、「第七回甲科練習生入所式」等(91~102頁)あり。

・「●雑録」中、によすい(おそらく宮崎如水か)[「日記の一片[続]」(109~110頁)に、湯目所長全島巡視の際の言動、行動の記載あり。

\*第9号(明治35年10月11日刊)

・「●雑録」中、「湯目所長の南清出張」(73頁)あり(要再確認)。

・「●雑録」中、によすい(おそらく宮崎如水か)[「日記の一片(つゞき)」(85~86頁)に、湯目所長全島巡視の際の言動、行動の記載あり。

\*第10号(明治35年11月11日刊)

・「●雑録」中、「湯目所長の帰任」(79頁)あり。

・「●雑録」中、によすい(おそらく宮崎如水か)[「日記の一片(つゞき)」(86~87頁)に、湯目所長全島巡視の際の言動、行動の記載あり。

\*第11号(明治35年12月11日刊。未見。ただし、第12号裏に「前号目次」あり。)

・不明

・「●雑録」中、によすい(おそらく宮崎如水か)[「日記の一片(つゞき)」(?~?頁)に、湯目所長全島巡視の際の言動、行動の記載ありか。「日記の一片」は、これで終結か。

\*第12号(明治36年1月11日刊)

・「●論説」中、湯目補隆「警察官司獄官の礼式服装に就て」(1~3頁)あり。

<sup>11</sup> 湯目補隆「徳山高く水長し」『児玉藤園將軍』(拓殖新報社、大正7年8月25日刊)後輯88、89頁、同「追憶三題」『台湾大観』(日本合同通信社、昭和7年12月25日刊。台北・成文出版社、1985(昭和60)年3月影印本あり。)169~175頁に記載の件と思われる。

<sup>12</sup> 「宮崎如水」とは、上記註10にいう(判任)教官宮崎直道のことかと思われる。

<sup>13</sup> 「林久三」は、明治33(1900)年12月末、同34(1901)年12月末各現在で「教務嘱託」、同35(1902)年9月30日「書記兼教官(土語担当)」任命、同37(1904)年5月17日「依願免官」(『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』19、21、22、23頁)(平成22年4月22日追加)

- ・「●雑録」中、「詞林」に、湯目北水名義の漢詩 2 句あり (59 頁)。

\*\*\*\*\*

【附録】本 HP 掲載鷺巣敦哉氏関係資料一覧 (令和 4 (2022) 年 7 月 31 日追加)

- ・「鷺巣敦哉氏と『台湾総督府警察沿革誌』の編纂について—日本統治下台湾警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu001.pdf>〉

- ・「鷺巣敦哉氏著作目録抄—日本統治下台湾警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu002.pdf>〉

- ・『鷺巣敦哉著作集 補遺』(緑蔭書房、平成 26 年 7 月 31 日刊) 概要—日本統治下台湾警察史の一齣—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu003.pdf>〉

- ・『鷺巣敦哉著作集』V (「雑誌所収著作」: 緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊)、同別巻 (「警察試験叢書・雑誌所収著作補遺・索引」: 同、平成 14 年 1 月 31 日刊) 及び『鷺巣敦哉著作集 補遺 警察試験叢書 (続)・雑誌所収著作補遺 (続)・索引』(同、平成 26 年 7 月 31 日刊) 所収論稿一覧—日本統治下台湾警察史の一齣— (本稿)

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisukiko.pdf>〉

- ・「鷺巣敦哉氏著『台湾統治回顧談 (台湾の領有と民心の変化)』(台湾警察協会、昭和 18 年 9 月 20 日刊)・雑誌『台湾地方行政』比較対照表 (三訂稿) —『鷺巣敦哉著作集』IV (『台湾統治回顧談 (台湾の領有と民心の変化)』: 緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊) 参考資料— 日本統治下台湾警察史の一齣—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisukaiko.pdf>〉

- ・「東方孝義・鷺巣敦哉両氏共編『警察語学試験問題及解答集』(警察試験叢書第四編、自己出版、昭和 10 年 11 月 30 日刊) の再発見 —日本統治下台湾警察語学教養の一齣—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/higashikata001.pdf>〉

- ・「鷺巣敦哉氏『警察試験叢書第一編・向上受験の手びき 附 全警察試験問題』及び台湾総督府警察官及司獄官練習所『練習生必携』(昭和 19 年 1 月刊) —警 —最近台湾再発見の日本統治下台湾警察史関係希観書二題— 日本統治下台湾警察史の一齣—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisutebiki.pdf>〉

- ・「村上収氏の御逝去を悼みて—『台湾総督府警察沿革誌 第二編 領台以後の治安状況 中巻 —台湾社会運動史—』編纂過程の究明によせて— 日本統治下台湾警察史の一齣—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/murakami001.pdf>〉

- ・「木村貞次郎氏台湾語関係著作目録抄—日本統治下台湾警察語学教養の一齣—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kimura001.pdf>〉

(了)